

アカディのフランス語についての一考察

金 成 秀

ABSTRACT

The history of Acadian French began with the foundation of Acadia by French settlers in the 17th century. There are about three million Acadian descendants in the world and only ten percent of them live in the Maritime Provinces of Canada. The ethnic identity of this people has long been based on the language and the religion. Under the English domination, the defence of the French language and Catholicism was a matter of great importance for the survival of the Acadian people.

The Official Language Act in 1969 declared that French is one of two official languages of Canada. At the provincial level, New Brunswick has adopted the bilingualism officially. However, the Acadian community is now facing linguistic assimilation in spite of the official bilingualism. The linguistic assimilation is a great menace to the identity of this community. It is necessary to study this matter from a sociolinguistic point of view.

This article also aims at an analysis of the Acadian French spoken in the Maritime Provinces from the following viewpoints: phonology and phonetics, morphology, syntax and lexicology.

キーワード : *Acadian French*

1. はじめに

フランス語もしくはカナダに関する研究をする者以外の人々にとって、アカディ(英語名アカディア)はきわめてなじみの薄い名称である。おそらく多くの人は今までこの名前を一度も耳にしたことがないであろう。アカディとは現在地図には存在せず、過去においても時代により不確定な領土をさす地名である。カナダの人口の4分の1を占めるフランス語系の人々はその殆どがケベック州に居住しているため、カナダのフランス語といえば、多くの人はケベックのフランス語を思い浮かべる。しかし、カナダのフランス語に関する研究において、アカディのフランス語はケベックのフランス語に次いで重要な研究対象となっている。本論文の研究対象となるアカディのフランス語とは、主に沿海諸州(ニュー・ブランズウィック州、ノヴァ・スコシア州、プリンス・エドワード・アイランド州)に居住するアカディアン達を使うフランス語である¹⁾。

本論文ではまずアカディの歴史について考察する。なぜなら、アカディのフランス語の形成は17世紀初頭のアカディ創立に始まり現在に至っているからである。宗教と言語が異なるイギリスの支配下でのアカディ民族(*le peuple acadien*)の「存続」(*la survivance*)は、カトリック宗教とフランス語の擁護とは切り離せない相互関係にあった。次に、アカディのフランス語の現状を民族存続にとって新たな脅威となる同化問題と関連させ、社会言語学的視点で考察してみる。最後に、規範フランス語と比較しながら、音韻論、形態論、統辞論、語彙論の側面からの考察を試みる。なお、本論文では、フランス語を研究対象とする論文の性格から、日本においては英語名アカディアが一般的であるがフランス語名アカディを使うとする。

2. アカディの形成とその歴史

2.1 アカディの語源

「アカディ」という名称はイタリア人航海士ジョヴァンニ・ダ・ヴェラザー

ノ（Giovanni Da Verrazano）の発見に由来するといわれている。1524年、彼はフランス王フランソワ1世に派遣されフロリダからカナダのニューファンランドを航海する途中、アメリカ東部メリーランドのチェサピーク湾を発見した。その美しさに魅了されたヴェラザーノは、ここを古代ギリシャの地上の楽園になぞらえてアルカディア（Arcadia、仏Arcadie）と命名した²⁾。それ以来、この名称がいくつかの変形で地図や公文書などにたびたび登場するようになる。アルカディアの変形であるラルカディア（Larcadia）が1548年のジャコモ・ガスタルディ（Giacomo Gastaldi）の地図に地名として初めて現れる。この名が示す場所は現在のマサチューセッツ州のケイブコッド湾（Cape cod Bay）である。その後、この名称はさらに北東の地域、すなわちノヴァ・スコシアを指すようになる。1603年、フランス国王アンリ4世はピエール・ショヴァン（Pierre Chauvin）を「カナダおよびラカディ（Lacadie）」の総督に任命する。ピエール・ショヴァンの死後、ド・モン（De Monts）は国王に宛てたニューフランスの探索と植民地化に関する請願書の中でラカディ（Lacadie）の名称を用いた。1601年のギヨーム・ルヴァセール（Guillaume Levasseur）の地図では現在のメイン州を「カディの沿岸」（Coste de Cadie）としており、シャンプレーンは*Des Sauvages*と題された国王宛の報告書において現在のカナダ沿海州を指す名称としてアルカディ（Arcadie）を用いた。

17世紀の初頭、アルカディアの変形であるアカディ（Acadie）の名称が文書と地図に広く用いられた。1628年から1763年の間、アカディ（Acadie）はニューイングランドの東とニューフランスの南東にまたがる不確定の領土を意味していた。しかし、1763年に北アメリカにおけるフランスのすべての植民地がイギリスに割譲されてからは、アカディの名称は地図から完全に消えてしまい、ニュー・ブランズウィック、ノヴァ・スコシア半島を含めた地名であるノヴァ・スコシアにとって替わられた。現在、アカディという地名はもはや地図には存在しないが、この名称が示す範囲はケープ・ブルトン島、プリンス・エドワード・アイランド、ガスベジ南部沿岸、マドレーヌ島など、アカディアンが多く住む歴史的領域を含む。

アカディの名称の由来に関しては、上記の説以外に沿海州に住んでいたミク

マク族の言葉からの借用説がある。それによれば、アカディは「野营地」を意味する先住民の言葉「アルガティグ」(Algatih) もしくは「肥沃な土地」を意味する「カディ」(Cadie) の変形である³⁾。この説をとなえる研究者達は、カナダ沿海州には「カディ」を接尾辞とするトラカディ(Tracadie)、ペスマカディ(Pesmocadie)、シュベナカディ(Chubenacadie)、シェヌカディ(Schenecadie)などの地名があるということを根拠の一つとしている。

以上で見たように「アカディ」の概念は時代により変化し、広義にはニューイングランドからニューファンランド島、そして狭義にはカナダ沿海州(現在のノヴァ・スコシアだけを指す場合もある)を指す名称として用いられてきた。

2.2 アカディの概略史

アカディアン達はケベック人達と歴史的には共通の祖国(フランス)を持つが、彼らとは異なった歴史とアイデンティティを持った独自のエスニック集団である。現在どちらもカナダ連邦に組み込まれているが、ケベックでは連邦からの独立志向が大きな流れとして絶えず存在しているのに比べ、アカディアン達はケベックの独立志向にある意味で冷ややかなまなざしを注いでいる。アカディアン達のこのような姿勢は、約4世紀の間絶えず自らの存続が脅かされてきた歴史に深く結びついている。

10、11世紀頃からカナダ大西洋沿岸にスキャンディナヴィア人が現れ、その後15世紀末、ジョン・カボットによりこの一帯がきわめて優れた漁場であることが報告されると、バスク、ブルターニュ、ノルマンディー、イギリスなどの漁民達が現れはじめた。16世紀の間、フランスとイギリスをはじめとするヨーロッパ諸国にとって、カナダ大西洋沿岸は鱈の産地として重要な漁場であり、ニューファンランド島沿岸に漁業基地が設立された。しかし、16世紀終わり頃にヨーロッパでフェルト帽が普及し、ビーヴァーの毛皮が帽子用の良質のフェルトになることから、カナダ先住民とのビーヴァーの毛皮交易が鱈漁業より重要性をおびることになる。まさしくこの毛皮交易のためにフランス人達のカナダへの進出が始まる。最初に北アメリカに植民地を設けたのはフランス人であった。

1603年、フランス王アンリ4世は、60名の入植者を一年間滞在させ、さらに先住民にキリスト教を布教するという条件で、独占企業家ド・モン（Pierre du Gua de Monts）に北アメリカでの毛皮交易の独占権を与えた。1604年3月、ド・モンはプトゥランクール（Jeans de Biencourt, baron de Poutrincourt）、シャンプレーン（Samuel de Champlain）と共に120名の入植者を率い二隻の船で北アメリカに向かった。2ヶ月の航海後、探検隊は現在のノヴァ・スコシアのLa Haveの岬に到着した。彼らは安全な場所を求めさらに探検を続け、同年6月現在のニュー・ブランズウィック州のパサマクォディ湾（Passamaquoddy Bay）に位置するサント・クロワ島（Île Sainte-Croix）を発見し、そこに毛皮交易の最初の拠点を築いた。ド・モンは入植者達の食量を調達するため、獲得した毛皮と一緒にプトゥランクールをフランスに戻した。島には水と樹木が欠乏したうえ過酷な気候条件のため、ド・モンと入植者は悲惨な冬を越さなければならなかった。春が訪れる前に島に残った者の半数が壊血病にかかり死んだ。翌年の7月、ド・モンはファンディ湾を横切りノヴァ・スコシアのポール・ロワヤル（現在のアナポリス・ロイヤル）に植民地を移した。ここは肥沃で農業にも適しており植民地設立を本格的に行えるようになった。

1607年、毛皮交易を巡る反目によりド・モンは国王から授かった独占権を失い、彼が率いて来た移住者達はフランスに戻ったためアカディの植民地化はしばらく中断する。ド・モンはアカディから手を引くが、ニューフランスでの独占的交易をあきらめなかった。その後、彼はセントローレンス河流域に対する独占的取引権を獲得し、シャンプレーンをこの地域に派遣した。1608年、シャンプレーンは現在のケベックシティに毛皮交易のための駐屯地を設立するが、これが後にニューフランスの首都になり、現在のケベック発祥の地となる。この時から、カナダにおけるフランスの二つの植民地、アカディとケベックは互いに異なった歴史を歩むことになる。このことは、アカディとケベックのフランス語がそれぞれ独自に変化していく要因の一つになった。1610年、プトゥランクールは法王の庇護のもとアカディに戻りポール・ロワヤルでの植民地設立を再開する。アカディの建設が実質的に始まったのはこの年である。それ故、プトゥランクールはアカディの創設者と見なされている。

アカディは設立当時からフランスとイギリスの覇権争いに翻弄され、その存続は絶え間ない脅威にさらされることになる。1613年ニューイングランドのヴァージニアからの探検隊はアカディにおけるイギリスの権利を主張しポール・ロワヤルを占領した。さらに、1621年イギリス国王ジェームス一世はスコットランド人のサー・ウィリアム・アレキサンダーにアカディの地を植民地にする特許を授けた。アカディはラテン語で「新しいスコットランド」を意味するノヴァ・スコシア（Nova Scotia）に改名される。この時以来、フランス人入植者が居住する地が、フランスにとってはアカディ、イギリスにとってはノヴァ・スコシアとそれぞれ異なった呼称で領有権争いの的になる。1632年3月29日のサン・ジェルマン・アン・レ講和条約（le traité de Saint-Germain-en-Laye）によりアカディはふたたびフランスに戻された。リシリュウ枢機卿はアカディの地理的条件を鑑み、ニューフランスとイギリスの緩衝地の役割を持たせるため、従兄弟のラジリー（Isaac de Razilly）をニューフランスにおける国王代理人およびアカディ総督の資格でアカディに派遣する。このことは、フランス国王政府がそれまで民間に任せていたアカディの植民地経営に乗り出したことを意味した。同年7月、ラジリーはアカディ再建のため、三隻の船で主にトゥレーヌ地方、ペリ地方、ブルターニュ地方などの出身者約300名を率いアカディアに向かった。この時期の入植者達が現在のアカディアン達の祖先の核をなしている。

1635年11月のラジリーの急死はラ・トゥール（La Tour）とドルネー（D'Aulnay）の間に総督の地位を巡る熾烈な闘争に火をつけることになる。1650年、後者の死により権力闘争に終止符が打たれるが、内部抗争の隙をつきイギリスがアカディに対して再び干渉を行う。この時期、アカディの人口は約400名と推定される。1654年にニューイングランドの軍隊がポール・ロワヤルを占領し、その後アカディは1667年のブレダ条約までふたたびイギリスの支配下に入る。1667年フランス領に戻ったアカディはフランス本国の援助を必要としていたが、ヴェルサイユにとってはニューフランスが最大の関心事であり、アカディはニューフランスとイギリスの植民地ニューイングランドとの緩衝地にすぎなかった。このような本国のアカディ政策のため、この地における植民

地建設は1680年代末まで、本国政府の支援を受けずにアカディアン自らの力により推進されていった。このことは彼らの独立精神とアイデンティティの形成に大きな影響を及ぼした。このころすでに、彼らの間では自らをフランス人ではなくアカディアンであるという意識が芽生えていた。

アカディアは本国に頼ることなく、フランスと敵対関係にあったニューイングランドと独自に交易を行い経済を運営していった。人口も年々増加し、1670年の最初の不完全な人口調査ではアカディアン人口は約500名と推定された。1686年に実施されたより正確な調査では915名と記録されている。しかしながら、アカディアが依然として孤立無援の状態にあるということには変わらず、すでに数万人の人口を有していたニューイングランドの脅威に絶えずさらされていた。

1688年、フランスとイギリスとの間でふたたび戦争が起き、ニューイングランドからの攻撃が始まった。1690年、ポール・ロワヤルはニューイングランドにより占領された後、1697年の講和条約によりフランスに返されるが、休戦状態はその後たった3年しか続かなかった。1702年にスペイン継承戦争が勃発すると、アカディアは再度イギリスの攻撃にさらされることになる。アカディア防衛のための本国からの支援を望まず、見捨てられたアカディアン達は、1704年と1707年のイギリス人達の攻撃に徹底的に抵抗し自らを守った。ヴェルサイユは、アカディア総督が植民地防衛に必要な、軍と食量の補給を要請したにもかかわらず、ヨーロッパでの戦争に気を取られ、ほんの少しの援助しか与えなかった。1710年、300人のアカディア軍は自らの防衛力を十倍以上も上回る3,400人のイギリス軍に包囲され、10日間に及ぶ抵抗の末イギリスに降伏した。1713年、ユトレヒト条約が締結され、アカディアはノヴァ・スコシアとなり、またポール・ロワヤルはアナポリス・ロイヤル（Annapolis Royal）に改名され完全にイギリスの領土となった。

イギリスにとってアカディアン達は獲得したばかりの植民地を維持するためになくはならぬ存在であった。なぜなら、予想に反して1749年までは、イギリスからの移民を殆ど引きつけることができなかったからである。イギリス人達は、宗教が異なり、自らの数を遙かに上回る一つにまとまったフランス系住

民を統治するという難問に取り組みなければならなかった。そのためイギリス王への忠誠を誓うの拒否し、フランスを反対するいかなる戦争においても中立を守ろうとしたアカディアン達を追放しようとはしなかった。1613年から1744年までは、ヨーロッパにおいてフランスとイギリスの間で平和が維持されていた。しかし、北アメリカにおいては両国間の反目が完全になくなったわけではない。1720年、フランスはケープ・ブルトン島のルイブール（Louisbourg）にポール・ロワヤルにとってかわる砦を築き町を建設した。このことはフランスがアカディを取り戻そうとしていることを意味しており、ノヴァ・スコシアのイギリス軍にとっては脅威であった。

1744年、オーストリア継承戦争の勃発により、北アメリカにおいてはノヴァ・スコシアとルイブールがフランスとイギリス間の戦闘の舞台となった。1745年のイギリスによるルイブールを陥落にもかかわらず、1748年のエクス・ラ・シャペル（Aix-la-Chapelle）の和約でルイブールはフランスに戻ってしまった。フランスはアカディアン達をノヴァ・スコシアのイギリス当局に対抗させようとし、一方イギリスはイギリス国王に忠誠を誓わない彼らを追放しようと考えた。1750年フランス人は現在のニュー・ブランズウィックとノヴァ・スコシアを結ぶ地峡の端にボセジュール（Beauséjour）砦を建て、イギリス人はそれに対抗しノヴァ・スコシア側にローレンス砦を建設した。アカディアン達はイギリス当局からふたたび、イギリス国王に忠誠を誓うかフランス本国に戻るかの選択を迫られる。彼らはそのどちらも拒否しノヴァ・スコシアに留まることを望んだ。しかし、1755年ハリファックスに駐留していたチャールズ・ローレンス（Charles Lawrence）総督は、彼らの存在がノヴァ・スコシアを危険にさらし植民地建設に不利であるとの確信から「アカディアン追放令」を出した。この年は、アカディの歴史にとって最も重要な年になる。すなわちアカディアン達が後に「ル・グラン・デランジュマン」（Le Grand Derangement）と呼ぶようになる悲劇の始まりであった。それはアカディアン達の集団意識から決して消えることなく、いつまでも生き続ける民族の悲惨な過去である。

当時のアカディアンの人口は約18,000人と推定される。その内、約6,000人は1749年から1752年の間に、イギリスの迫害の脅威から逃れるため、ニュー・

ブランズウィックなど周辺のフランス領に避難していた。また1752年から「アカディアン追放令」が実行に移されるまでに、数千人がすでにイギリスの支配が及びにくい森の中に逃れていた。1755年10月27日、24隻の船に積み込まれた4,800人のアカディアン達がノヴァ・スコシアから追放された。なお、この時の悲劇の舞台の一つであったグラン・プレ（Grand-Pré）は、アメリカの詩人ロングフェロー（Longfellow）の詩「エヴァンジェリン」（Evangeline）に歌われ（1847年）世界中に知れわたるようになる。同年11月と12月にはそれぞれ約1,800人、約600人のアカディアン達が追放された。1763年までの8年間、約10,000人のアカディアンが北アメリカのイギリス植民地のあちこちとルイジアナ、イギリス、フランスなどに四散させられた。彼らが追放された後、ノヴァ・スコシアにはニューイングランドから約8,000人の入植者がやってきた。かくして、フランス人入植者達が開拓した土地は、イギリス人が初めて多数を占める名実共にイギリスの植民地になった。

1756年に勃発したヨーロッパにおけるフランスとイギリスの7年戦争は、後者の勝利で幕を閉じ1763年のパリ条約によりニューフランスのすべてがイギリスに割譲された。これにより北アメリカ大陸でのイギリスの覇権が最終的に確立した。1764年、イギリス当局は、追放されたアカディアン達がイギリス国王に忠誠を誓い、小さなグループに分散して暮らすことを条件に、かつてアカディと呼ばれた望郷の地に戻ることを許した。かつて集团的に追放されたり、迫害を逃れて逃げたアカディン達は、徐々にそして個々に帰還を始め主にニュー・ブランズウィックの沿岸に住みついた。やがてこの地域のアカディアン人口は従来の居住地であるノヴァ・スコシア半島のそれを上回るようになった。1771年、約2,000人のアカディアンが沿海諸州に戻り住んでいた。

現在、アカディアンの人口は「ル・グラン・デランジュマン」により、北アメリカ大陸各地に四散させられた「流浪の民」の子孫を含め、約300万人と推定される。10分の1に当たる約30万人がカナダ沿海諸州に住んでいる。苦難の歴史を歩んできたアカディアン達が、自らのアイデンティティを守りつづけるうえで、フランス語とカトリック信仰が大きな役割を果たしてきた。現在、共通の言語、文化、歴史的過去を柱にアカディの内外に居住するアカディアン達

の様々なコミュニティーが連携を深めている。その一環として、1994年にニュー・ブランズウィックで最初の「世界アカディアン会議」が開かれたのに次いで、1999年8月にアメリカのルイジアナ州で「第二回世界アカディアン会議」が開催された。

3. アカディのフランス語の現状

3.1 アカディアンのアイデンティティ擁護と言語問題

アカディアン達は、19世紀初頭まで政治的諸権利を剥奪され、孤立したコミュニティとして暮らしていた。彼らとイギリス系多数派住民は非征服民族と征服民族の関係にあり、言語と宗教の面で異なっていた。多数派住民はプロテスタントで英語を使用し、一方アカディアン達はカトリック宗教とフランス語を固守し続けていた。1820年末にアカディアン達に選挙権が与えられ、彼らは徐々に政治に参与する機会を手になることになった。このことは、彼らが長い間の孤立から抜け出す第一歩になると同時に、彼らのアイデンティティが脅かされる要因の一つになった。長い間にわたり孤立状態に置かれていたことが、彼らのアングロ・サクソン文化（言語、宗教）への同化を防ぐのに少なからず貢献したことは否めない。

アカディアン達はその殆どが第一次産業（農業、漁業など）に従事し、自給自足の生活を営んでいた。彼らの居住区はイギリス系住民が多く住む都市部から遠く離れた交通の不便な農・漁村部であった。さらに、カトリック教会は宗教を通じて、フランス語を守り（フランス語で宗教行事を行う）、信者（アカディアン）達がイギリス（英語、プロテスタント）に同化するのを妨げるのに大きな役割を果たした。しかし、アカディアン知識人達の啓蒙活動と民族再生の運動は、アカディアン・コミュニティの政治的権利の拡大に結びついていった。それに伴い、イギリス系住民との接触が拡大していった。

アカディアン達の同化を促すのに最も大きく働いたのは、伝統的な農村部（フランス語カトリックの世界）から、オンタリオ州、合衆国などの工業化が進んだ都市部（英語、プロテスタン支配）への移住であった。都市部への移住

は19世紀中葉から徐々に始まったが、特に、第二次世界大戦後の産業発展と産業構造変化はそれをさらに促進させた⁴⁾。1960年代からアカディアン労働人口は第一次産業から第二次産業さらに第三次産業へと徐々に移転していった。都市に対するあこがれと市場経済の発展に伴う労働市場の拡大は、仕事とよりよい生活を求めるアカディアン達を都市に駆り立てた。それまではまれであった英語系住民との接触が、非日常的行為から日常的行為へと変化していった。この変化は彼らが英語系住民に同化することを促す主要因になった。

意思疎通の手段という性格を持つ言語は、人の内面世界にかかわる宗教に比べ同化しやすいといえる。通常、2つの異なる言語集団間のコミュニケーションにおいて、政治、経済、人口などすべての面で少数派に置かれている集団は、もう一方の多数派の言語を採用せざるをえない。英語系住民（雇用主、同僚、公共機関、商店）との日常的接触はフランス語ではなく英語で実現される。英語が支配する都市部では、家庭をのぞき学校教育を始めあらゆる環境が英語の世界である。したがって社会生活を営むためには英語を使用せざるをえず、また英語能力が社会的地位の向上に密接に結びついていることから、英語圧力はさらに強くなる。このように彼らは都市生活に組み込まれた時から、絶え間ない同化の圧力にさらされていく。

アカディアン達は英語系住民との同等の政治的権利を獲得するため、19世紀中葉から様々な闘いを繰り広げると同時に、それを自らのアイデンティティを守ることに強く結びつけてきた。とりわけ、フランス語擁護のための様々な闘いと活動は、単に文化的権利の枠でなく、民族存続の根源にかかわる最も重要な課題の一つと見なされた。1867年7月8日、ニュー・ブランズウィックのシェディアックで沿海諸州で初めてのフランス語新聞「ル・モニテール・アカディアン」(Le Moniteur Acadien) が誕生した。この新聞は自らの意思を自らの言語で代弁し、自らの言語と文化を守ることを目指した。この新聞の一面に記されたモットーは「我々の宗教、我々の言語そして我々の風習」であった。フランス擁護のための闘いにおいて特記すべき出来事は、パスカル・ポワリエ⁵⁾による「アカディア方言辞典」(Le Glossaire acadien) の編纂の試みである。1875年頃に始まり、その原稿の一部は「ル・モニテール・アカディアン」、「エ

ヴァンジェリン」などの新聞紙上に掲載された。彼は辞典編纂によりアカディのフランス語の地位を向上させ、その文化の振興に大きく貢献した。この辞典が日の目を見るのは彼の死後数十年たってからである。

アカディアン達にとってフランス語の教育は、自らの文化と言語を守り発展させるうえで非常に重要であった。沿海諸州のカトリック教会は19世紀末から、ケベック出身の修道士および修道女の援助を受け独自の学校を設け運営し、宗教教育を柱とするフランス語による教育を行った。しかし、財政難と英語系プロテスタント住民の利益を代弁する州政府の敵意により、さまざまな問題を抱えることになる。1871年ニュー・ブランズウィック州で採択された「コモン・スクール法」(Common School Act)は、宗教から独立した公立学校の設立を定め、カトリック系学校に対するすべての助成金を廃止し、すべての教師をフレデリクトンの英語系師範学校で養成することを命じた。すなわち、この法令はフランス語教育を廃止し英語による教育の一元化をねらったのである。アカディアン達はこの法令に激しく抵抗し、1875年8月、学校選択の権利を取り戻した。このことはアカディアン達が運営する学校の発展には結びつかなかった。なぜなら、州当局は「コモン・スクール法」の名のもとに、フランス系カトリック教会が運営する学校には財政援助を行わなかったのである。

フランス語の擁護は、その(もしくはそれによる)教育ばかりではなく、その社会的地位を高めることによりいっそう確かなものとなる。都市部のフランス語系住民が多数を占める居住地域においても、彼らは職場、商店などで英語の使用を強制される。そのためアカディアン達は自分達のフランス語が劣っている言語とみなし、その反動として英語を日常的に使用するようになり同化が促進されていった。アカディアンのアイデンティティ擁護のためには、フランス語の社会的地位を向上させることはフランス語教育を強化発展させるのと同じく重要な課題である。

3.2 沿海諸州における言語に関する法律

沿海諸州では言語に関する様々な法律が制定され、以前にくらべフランス語の法的地位が向上している。フランス語の法的地位は沿海諸州においてそれぞ

れ異なっている。

a. ニュー・ブランズウィック州

この州はカナダで唯一州レベルにおいて二重言語主義に基づく言語政策を実施している。すなわち、フランス語が英語と共に公用語の地位にある。1970年代中葉まで、学校教育は英語（部分的にフランス語）で行われていたが、1976年に制定された法律により、フランス語系住民が多数を占める地域においてフランス語だけによる教育が認められるようになった。また、フランス語系住民が少数派の地域では二重言語教育が実施された。1981年には英語系住民とフランス語系住民の平等が法律により定められ、少数派フランス語系住民に不利に働く二重言語による学校制度を廃止した。これにより英語系とフランス語系住民それぞれのための独自の教育制度が確立し、フランス語系住民の子弟達が母語による教育を受ける権利がより確固としたものとなった。しかし、州都フレデリクトン（約4.7万人）、州最大の都市セント・ジョン（約10万人）など英語系住民が多数を占める都市では、この制度が実質的に施行されるのは最近になってからである。州第2の都市モンクトン（約5.9万人）には、フランス語系のモンクトン大学（L'université de Moncton）がある。1968年には同大学に沿海諸州で最初のフランス語系師範学校が設立され、1980年には他の2つの単科大学⁶⁾が同大学に統合された。裁判所における使用言語に関しては、1976年と1979年の法律では、フランス語で裁判を受ける権利が認められ、1990年から証人および被告が通訳を介さずに、フランス語で陳述を行えるようになった。

b. ノヴァ・スコシア州

1981年の教育に関する新しい法律により「アカディアン学校」が認められる。フランス語系住民は彼らが多く居住する地域で、フランス語による教育（小、中学校）を受けることができるようになる。人文科学系のフランス語系大学、サント・アンヌ大学（L'université de Sainte-Anne）がある。1987年からは、刑事訴訟に関してはフランス語で訴訟が可能になった。

c. プリンス・エドワード・アイランド州

フランス語による教育権が公式に認められるのは、他の2州に比べ遅れ1985年になってからである。それ以前は、フランス語系の生徒が多数を占める学校

アカディアのフランス語についての一考察(金)

では、フランス語が第2言語として教えられ、フランス語読本が許容されていたにすぎない。1990年アカディアン学校の自治が認められ、フランス語系の最初の判事が任命された。

3.3 深刻化する同化問題

孤立状態から脱皮し始めると同時に、アカディアン・コミュニティは人口の流失と英語系コミュニティへの同化というあらたな問題に直面することになった。統計で見るアカディアンの同化の度合いは、2つの方法で計ることができる。まず、総人口におけるフランス語を母語とする人口の比率の推移により、フランス語使用者が英語使用者に移転した割合を推定することができる。次に、フランス語を母語とする人口とフランス語を使用言語とする人口の比率の推移により、幼年時代に主に両親から教わった言語、すなわち母語が、どれくらいの割合で他の言語に置き換えられるのかをはかることができる。

表1 母語による人口分布 (1996)
Population, selon la langue maternelle (1996)

言語	州	P.E.I.	N.S.	N.B.
総人口(1+2)		132,855	899,970	729,625
単数回答者数(1)		132,415	895,775	722,280
英語		124,805	836,240	473,260
フランス語		5,550	35,040	239,730
その他		2,060	24,495	9,290
複数回答者数(2)		440	4,195	6,345
フランス語と英語		315	2,400	5,275
英語と非公用語		115	1,635	980
フランス語と非公用語		15	100	65
その他		0	55	25

Source : *Statistique Canada, Recensement de 1996*

注 P.E.I. (プリンス・エドワード・アイランド州)、N.S. (ノヴァ・スコシア州)、N.B. (ニュー・ブランズウィック州)

表2 沿海諸州におけるフランス語系住民人口比率の推移（1971-1996）

Evolution des taux des Francophones dans les Provinces Maritimes⁷⁾ (1971-1996)

州	年度	1971	1981	1986	1991	1996
P.E.I.		6.6%	5.0%	4.7%	4.5%	4.3%
N.S.		5.0%	4.3%	4.1%	4.2%	4.0%
N.B.		33.8%	33.6%	33.5%	34.0%	33.2%

Source: *Le Quotidien. le mardi 2 décembre, 1997 (Statistique Canada)*
et Dallaire et Lachapelle, Secrétariat d'Etat, 1990

カナダは連邦レベルでは英語とフランス語を公用語とする二重言語主義を実施している。1996年の国勢調査によると、フランス語を母語とする人の数はカナダ全人口の23.5%を占めている。フランス語系住民のうち約87%がケベック州に居住し、沿海諸州にはわずか3.65%しか住んでいない。残りの9.35%がその他の地域である。ケベック州ではフランス語系住民が人口の81.5%を占め、フランス語が絶対的多数派の地位を占めているのに対し、沿海諸州ではフランス語系住民はきわめて少数派である。表1が示すように母語を複数とする人たちが少数ながら存在する。これは言語による人口調査が自己申告に基づいておこなわれるからである。母語を複数とする人口はカナダ全体では1.4%であるが、沿海諸州では0.6%にすぎない。

表2で示されているように、1996年現在ニュー・ブランズウィック州では、フランス語系住民は33.2%で、少数派であるが州人口の3分の1を占めている。一方、プリンス・エドワード・アイランド州、ノヴァ・スコシア州ではそれぞれ4.3%と4.0%に過ぎない。

1971年から1996年までの間、沿海諸州すべての州においてフランス語系住民の比率が低くなっている。1971年に比べ1996年は、ニュー・ブランズウィック州とノヴァ・スコシア州では、それよりそれぞれ0.6ポイントの微減であるが、プリンス・エドワード・アイランド州では2.3ポイントも減少している。

次に、フランス語を家庭で使用する人口比率の推移を見ながら、フランス語系住民の同化現象を考察する。フランス語が州レベルの唯一の公用語であるケベック州では、フランス語を家庭で使用する人口の割合（82.8%）が、フラン

アカディのフランス語についての一考察 (金)

ス語系住民の割合(81.5%)を上回っている。一方、沿海諸州すべての州でフランス語の地位がさらに少数派に追いやられている。ニュー・ブランズウィック州では、フランス語系住民の92%が家庭においてもフランス語を使用しているため、様々な圧力にもかかわらず同化現象に抵抗しているのが分かる。しかし、プリンス・エドワード・アイランド州とノヴァ・スコシア州では、その割合がそれぞれ52%、56%である。このことは、このふたつの州においては、フランス語系の人口の約半分が日常生活において殆どフランス語を使用しないということを意味する。なぜならば、この二つの州においては英語だけが公用語であるため、公共施設、職場、商店などではフランス語が通じないからである。ニュー・ブランズウィック州でフランス語使用率が高いのは、フランス語系住民が人口に占める割合が他の2州に比べ高いこと、そして州レベルでの二重言語主義によりフランス語の法的小よび社会的地位が比較的安定しているためであろう。

表3 フランス語を家庭で使用する人口比率の推移

Evolution des taux de la population qui parle le français à la maison

州	年度	1971	1991	1996
P.E.I.		4.0%	2.4%	2.2%
N.S.		3.5%	2.5%	2.2%
N.B.		31.4%	31.2%	30.5%

Source: *Le Quotidien, le mardi 2 décembre, 1997 (Statistique Canada)*

表3が示すとおり、フランス語を家庭で使用する人口の割合は、1971年から1996年の間、ニュー・ブランズウィック州では減少がみられるが比較的安定している。一方、ノヴァ・スコシア州とプリンス・エドワード・アイランド州では、1971年に比べた1996年の数値は、それぞれ約37%、45%も減少している。表1と表3をもとに同化率を計ると、1996年現在ニュー・ブランズウィック州、プリンス・エドワード・アイランド州、ノヴァ・スコシア州はそれぞれ8.4%、47.7%、43.6%となる。1981年から1996年の間、常に最も同化率が高いのはプリンス・エドワード・アイランド州で、フランス語系住民のほぼ半分が同化し

ている。同化現象は農村部に比べ都市部においてより深刻で、その傾向は1970年代初頭にすでに現れている。表4が示すように都市部では農村部の2倍から

表4 都市部と農村部における同化率

Les taux d'assimilation des Francophones dans les centres urbains et les milieux ruraux

	都市部 (Centres urbains)	農村部 (Milieux ruraux)
N.B.	12%	4%
P.E.I.	64%	32%
N.E.	59%	17%

Source: *Les Acadiens*, Jean-Claude Vernex

3倍の割合で同化が進んでいる。

農村部のアカディアン達は英語系住民から離れて暮らしており、彼らと日常的に接する機会が比較的少ない。アカディアン・コミュニティの中で仕事をし日常生活を営むため、英語を使わなければならない状況に置かれることが都市部に比べ少ない。一方、都市部では職場をはじめ日常生活においても英語を使用するため、家庭においても徐々にフランス語を使わなくなってしまう。特に、都市部に住む若い世代は、自分たちが使うフランス語がフランス（時にはケベック）のフランス語と英語に比べ2重に劣った言語であるという劣等意識のため、ますます英語を日常的に使用する傾向にある。

以上統計で見ると、近年アカディアン達の同化の流れはますます加速している。アカディアン達は1775年の「アカディアン追放令」の悲劇から不死鳥のごとく再生し、その後200年以上にわたりカトリック宗教、フランス語、風習を日常生活の中でかたくなに守りながら自分たちのアイデンティティを保持してきた。その過程でフランス人入植者コミュニティからアカディアン民族へと形成されてきた。しかし、近年のアメリカ文化の氾濫と市場経済のさらなるグローバル化は、「追放」という暴力がなしえなかったアカディアンの同化を非暴力的方法で促進させている。かつては「ル・グラン・デランジェマン」がアカディアン民統の「存続」を危機にさらしたが、今日、同化がアカディアン

民族の「存続」(survivance)にとって大きな脅威である。アカディ民族にとって、フランス語の擁護は単に言語上の問題ではなく、自らの「存続」を左右する重要な課題である。

4. アカディのフランス語の特徴

カナダのアカディアンたちは主にニュー・ブランズウィック州、プリンス・エドワード・アイランド州、ノヴァ・スコシア州など沿海諸州に住んでおり、ケベック州のガスペジ、ニューファンランド州などにも小さなアカディアン・コミュニティが存在する。この論文では沿海諸州のアカディアン達のフランス語を中心に音韻および音声、形態、統辞、語彙の面から考察することにする。使用人口が比較的少ないにもかかわらず、アカディのフランス語はすべてのアカディアン居住区において均質な言語ではない。ある地域で見られる言語的特徴が他の地域には当てはまらない場合がある。したがって、最も全般的な特徴を中心にアカディのフランス語について記述する。

4.1 音韻体系と音声上の特徴

4.1.1 音韻体系

アカディのフランス語は規範フランス語と様々な面で異なるが、まず両者の音韻システムの違いをのべるとする。後者の音韻体系が36の音素で成り立っているのに対し、前者は33の音素である。アカディのフランス語の音韻体系においては [a] は音素として認められない。半母音 [j]、[ɥ]、[w] は規範フランス語において独自の音素として認められるが、アカディのフランス語ではそれぞれ [i]、[y]、[u] の異音 (allophone) である。たとえば、規範フランス語においては、abeille (大修道院) [abej] と abbaye (蜜蜂) [abei] の二つの語は、[ɛ] と [e] の異なる音素と共に [j] と [i] によって区別される。他方、アカディのフランス語においては [j] が [i] の異音にすぎないので、[ɛ] と [e] だけが2つの語を区別する機能を持つ。フランスでは鼻母音 [œ] と [ɛ] の違いが徐々になくなっているが、不定冠詞 un の使用頻度が高いため

完全に消えてはいない。しかし、この音素はアカディのフランス語音韻体系から消失してしまった。(Louise Péronnet) アカディのフランス語には、規範フランス語の音韻体系に独自の音素として存在しない二つの音素 [h]、[ɛ] ([ɛ] の長母音) がある。子音字 h は文法上においては無音の h (h muet) と有気音の h (h aspiré) に区別されるがどちらも発音されない。したがって、hauteur (高さ) と auteur (著作者) は同音異義語であり、発音上においてこれら二つの語が区別されるのは冠詞と結合した場合である。名詞 hauteur の h は有気音の h のため冠詞 la は母音省略 (élision) されることがなく、la hauteur [la otœ:r] と発音され、名詞 auteur の定冠詞 le は母音省略され [lotœ:r] と発音されるため同音異義語のこれら二つの語が区別される。この点に関して、アカディのフランス語では音韻体系に [h] が音素として存在し発音されるため、これらの語は同音異義語とは見なされない。子音字 h が発音される語は、殆どがゲルマン語源を持つ有気音の h の語である⁸⁾。

haler [hale] — aller [ale]

hauteur [hotœ:(r)] — auteur [otœ:(r)]

アカディのフランス語では、短母音と長母音の区別が以然として残っているが、母音の長さの違いだけで意味の違いを表すことはまれである。母音の長さの違いは、多くの場合 patte [pat] (短母音)、pâte [pat] (長母音) のように異なった音色を持つ語と結びついており、二つの語を区別する機能を部分的にしか持たない。上ですでに述べたが [ɛ] は [ɛ] とは異なる独自の音素でありあらゆる場合において長母音である。

lettre [lɛt(r)] l'être [lɛt(r)]

poil [pwɛl] poêle [pwɛl]

フランスでは、[ø] は語の末尾以外では [œ] と発音され、そして北部の半閉母音 [o] は [ɔ] に開く傾向がある。また、南部地域では [a] は前音化され [a] と発音されたり、これら二つの母音の区別が比較的行われている北部地域においても、これら二つの母音を中間の [A] で発音する傾向が見られる。他方、アカディのフランス語においては [ø] と [œ] (jeûne [jœn] - jeune [jœn]), [o] と [ɔ] (pôle [pol] - Paul [pɔl]), [a] と [a] (patte [pat] -

pâte [pat]) の発音上の対立が顕著に残っている。

4. 1. 2 音声上の特徴

一般的にアカディのフランス語の母音は規範フランス語のそれに比べ、緊張度が弱くゆるむ (relaché) 傾向にある。特に [i]、[y]、[u] は次にくる子音の影響を受け規範フランス語に比べより開音になり [I]、[Y]、[U] のように発音される。なおこのような母音の開音化はケベックのフランス語にも共通して見られる。

pipe [pIp] butte [bYt] soupe [sUp]

アカディのフランス語は母音、子音の発音において多くの特徴を有するが、それらについて規範フランス語と対比させながら具体的に考察してみる。例にあげる語に関しては、先にアカディのフランス語の発音、そして次に規範フランス語の発音を記す。

a. [o], [ɔ] / [u]

homme [um]-[ɔm]	pomme [pum]-[pɔm]
nommer [nume]-[nɔme]	personne [parsun]-[persɔn]
friponne [fripun]-[fripɔn]	chose [fu:z]-[fo:z]

鼻子音 [m]、[n] および摩擦音 [z] が後続する場合、[o]、[ɔ] は [u] と発音される。

b. [u] / [o], [ɔ]

fournir > fornir (<i>fornir</i> 1160)	goudron > godron (<i>gotran</i> 1647)
ournée > journée (<i>jornée</i> 1160)	louvoyer > loveyer (<i>lovoyer</i> 1621)

[u] が [o]、[ɔ] と発音される語の数量は限られているが、上記の例に見られるように、それらは語源をたどれば、かつて [o] もしくは [ɔ] と発音されていた語である。例えば、アカディのフランス語では動詞 *oublier* を *oblier* と発音する。この動詞の語源は俗ラテン語の *obluder* であり、フランス語では11世紀中葉までは *oblier* (Vie de Saint Alexis, 1050) と表記されていた。11

世紀末に現れた *ublier* により *oblier* は徐々に駆逐され、現在フランスでは一部の方言に残っているだけである。

c. [ɔ̃] / [ã]

maison [mezã]-[mezɔ̃]	cloison [klwezã]-[klwazɔ̃]
toison [twezã]-[twazɔ̃]	garçon [garsã]-[garsɔ̃]
monde [mãd]-[mɔ̃d]	mouton [mutã]-[mutɔ̃]

語の末尾の [ɔ̃] が開音化し [ã] と発音される。このような [ɔ̃] の開音化の傾向はケベックのフランス語においても見られるが、さらに開き [ã] に発音されることは一般的にまれである。

d. [ɛ̃] / [ẽ]

bière [bje:r]-[bje:ɛ̃]	dernière [darnie:r]-[dernje:ɛ̃]
frère [fre:r]-[fre:ɛ̃]	père [pe:r]-[pe:ɛ̃]
neige [ne:ʒ]-[ne:ʒɛ̃]	seize [se:z]-[se:zɛ̃]

語の末尾の [r]、[z]、[ʒ] の前の [ɛ̃] は [ẽ] と発音される。このように発音されるのは一定の語に限られている。この変異体 (variante) [ẽ] はケベックの俗語 (le joual) にも現れる。フランスでも長い間、閉鎖音節語の末尾の *E* の発音が [ɛ̃] と [ẽ] の間で揺れていたことは、18世紀まで *terre: père* の脚韻は批判されていたということから明らかである。19世紀においても、学校では依然として語の末尾の /Eɜ̃/(collège, liège, piège, etc) は [ẽ] の音色で教えられていた。規範フランス語では *mère* (母) と *mer* (海)、*père* (父) と *paire* (対、組) はそれぞれ同音語である。一方、アカディのフランス語ではこれらは同音語ではない。

<i>mère</i> [me:r] / <i>mer</i> [me:r]	<i>père</i> [pe:r] / <i>paire</i> [pe:r]
--	--

e. [ɛr] / [ar]

cercle [sark(l)]-[sɛrkl]	chercher [ʃarfɛ]-[ʃɛrfɛ]
ferme [farm]-[fɛrm]	merci [marsɪ]-[mɛrsɪ]

perle [par(l)]-[perl] verge [varʒ]-[verʒ]

[er] に子音が後続する場合 [ar] と発音される。この特徴はケベックのフランス語にも現れ、フランスの中西部地方と中部地方の方言にも残っている。

f. [wa] / [we]

armoire [armwɛr]-[armwar] boite [bwɛt]-[bwat]
 coiffe [kwɛf]-[kwaf] étoile [ɛtwɛl]-[ɛtwal]
 soir [swɛr]-[swar] paroisse [parwɛs]-[parwas]

アカディのフランス語に今なお残っている [wɛ] は、17世紀頃のフランスで一般的であった古風な発音である。13世紀から [wɛ] の発音は [we] と [wɛ] の間で揺れていて、16世紀頃には次第に後者が優勢になっていった。さらに、パリの民衆の発音では [wɛ] がより開音化し [wa] に変化していった。当時の文法家達の強い反対にもかかわらず、やがて [wa] の発音が正しく、[wɛ] は農民の発音と見なされるようになった。

g. [t], [d] / [tʃ], [dʒ]

amitié [amitʃɛ]-[amitje] moitié [mɔtʃɛ]-[mowatje]
 tiède [tʃɛd]-[tjed] diable [dʒa:b]-[dja:bl]⁹⁾
 Acadien [akadʒɛ]-[akadjɛ] Dieu [dʒø]-[djø]

[t] [d] は前方母音と結びついた半母音 [j] の前で、それぞれシュー音の口蓋音 (chuintante palatale) となり [tʃ] [dʒ] と発音される。[tʃ] [dʒ] の発音は古フランス語に存在したが、12世紀に入り次第に [ʃ] [ʒ] へ縮減していき消滅した。なおケベックのフランス語においては、[t], [d] が [i], [y] の前で歯擦音化 (assibilation) しそれぞれ [ts], [dz] となる。

h. [k], [g] / [tʃ], [dʒ]

Québec [tʃɛbɛk]-[kebek] aucun [otʃɛ]-[okɛ]
 caisse [tʃɛs]-[kes] paquet [patʃɛ]-[pake]
 guide [dʒid]-[gid] guetter [dʒɛte]-[gete]

gueule [dʒœl]-[gœl] regain [rdʒɛ]-[r(ə)gɛ]

前方母音 [i] [e] の前の [k], [g] は口蓋化し、それぞれ [tʃ], [dʒ] と発音される。この場合、[tʃ], [dʒ] はそれぞれ [k], [g] の異音である。これらの発音は古フランス語期にさかのぼると推測される。12世紀後半まで、当時の書記法にしたがい *c* (*qu*) は子音字 *i*, *e* の前では [ts], *o*, *u* の前では [k] と発音され、そして、*a* の前では主に [k] であったが [tʃ] の場合もあった。*g* は *i*, *e* の前では [dʒ] と *o*, *u* の前では [g] は主に [g] もしくは [dʒ] と発音された。しかし、上記のように古フランス語期において *c* (*qu*) が *i* と *e* の前では [ts] と発音されていたのに、なぜアカディのフランス語では [ts] になったのであろうか。それは、*c* が *a* の前で [tʃ] と発音されたこと、さらに *c* と *g* の相関 (correlation) から起こるアナロジー (すなわち [tʃ] と [dʒ] の相関) によるものではないかと推測する。なお、[tʃ] の発音はフランス中西部の方言に残っている¹⁰⁾。

i. 語の末尾の子音字 -t, -s の発音

bout [bUt] debout [dbUt] tout [tUt] inquiet [ɛtʃet]

規範フランス語において本来発音されない子音字 -t が発音される。

一方、gens [ʒã] の語のように本来発音されない末尾の -s が発音され、fils [fis] のように本来 -s が発音される語において発音されない。そのため語の末尾の -s のリエゾン は -t によって取り替えられ un gro-z-homme が un gro-t-homme と発音されることがある。

j. [l], [r] の脱落

語の末尾の子音 [l], [r] は特に閉鎖音の後で脱落する傾向がある。

table [tab] boucle [bUk] fable [fab]
notre [nɔt] coudre [kUd] propre [prɔp]

quelque [tʃek], leur [lœ] のように、語末以外や閉鎖音の後でない場合においても脱落することがある。なお、子音 [l], [r] の脱落はケベックのフランス語やフランスの俗語においても見られる。

アカディのフランス語の音韻体系と音声上の様々な特徴について述べてきたが、それらはフランス中西部（主にサントンジユ、ポワトゥー）の方言、17世紀頃のフランスの古風な発音、俗語の発音などと多くの共通点があるのが分かる。フランス中西部からの入植者たちが、現在のアカディアンたちの祖先の多くの部分を占めているということと、アカディのフランス語がアカディ創立以降、フランス本国で起きた言語上の様々な変化の影響をあまり受けなかったことに関連する。

4.2 形態論上の特徴

形態論上の特徴に関しては、アカディのフランス語はケベックのフランス語と多くの共通点をもっており、それらのうちいくつかはフランス語の俗語にも見られるものである。

a. 形容詞および名詞の語尾 -eur が -eux になる。

menteur - menteux, coureur - coureux, pêcheur - pêcheux
bêcheur - écheux, brailleur - brailleux

b. 指示形容詞は名詞の性数に関わりなく c' t, c' te (s), c' (またはその変形) になる。

c' t livre (ce livre) c' t homme (cet homme)
c' te femme (cette femme) c' tes hommes (ces hommes)
à c' printemps (ce printemps) à c' tâannée (cette année)

c. 指示代名詞 celui-ci, celui-là は cti-cit, cti-la, ctell-là (またはその変形) の形になる。

《Et c'ti-là qui trouve un trésor, (...)》(A. Maillet)

ケベックのボース地方、フランス北部および西部地方の方言でこの形が用いられることがある。

d. 人称代名詞の三人称は性数に関係なく i の形で表す。

《*I s'en vient.*》 (Il vient).

《*I étions pas solides su leu pieds.*》 (Ils n'étaient pas solides sur leurs pieds). (L. Perronet)

《*Ces jeunes filles-là, i sont excitées.*》 (Ces jeunes filles-là, elles sont excitées). (L. Perronet)

女性形には a, alle, ielle などの形がある。a の形は数の区別なく使われ、alle は単数で母音接続 (hiatus) を避けるために、そして ielle は被制格において使われる。

《*A' m'a dit que fallit aouère son avenir.*》 (elle m'a dit qu'il faille avoir son avenir). (A. Maillet)

《*Alle est bonne (elle est bonne).*》 (P. Poirier)

《*C'te robe-là est à ielle.*》 (cette robe-là est à elle). (E. Boudreau)

e. 1 人称単数形の je が複数形 nous を表す。

《*Je nous avons beaucoup amusés.*》 (nous nous sommes beaucoup amusés). (P. Poirier)

《*Coume ça je serons au moins deux.*》 (comme ça nous serons au moins deux). (A. Maillet)

f. 動詞の三人称複数 は -ont で規則的に語尾変化する。

《*Des marionnettes vartes et roses qui dansont (...).*》 (A. Maillet)

《*I avont tout signè.*》 (L. Péronnet)

《*I trafiquiont.*》

g. 複合過去時制の助動詞は avoir のみを用いる。

規範フランス語の複合過去時制は助動詞 (avoir, être) と過去分詞で成り立っている。アカディのフランス語では、助動詞としての être は受動態にか用いられず、avoir のみが複合過去時制の助動詞になる。

《*Quand il a arrivé aux Etats.*》 (Quand il est arrivé aux Etats-Unis)

《*I s'avont préparé à partir.*》 (Ils se sont préparés à partir)

h. 代名動詞の用法が規範フランス語と異なる。

他動詞が再帰の意味に用いられ、代名動詞のような機能を持つ。*Je promène* (Je me promène)。フランス語では直説目的補語が身体の一部を表すとき、所有形容詞の使用を避けるため代名動詞を用いることがある。それとのアナロジーから、身体の一部を表す語が直接目的であっても他動詞であるべき文において代名動詞を用いる。*se fermer les yeux* (fermer les yeux), *se fourrer le nez* (fourrer le nez)。

フランスの俗語にも見られるが、補語代名詞を主語の人称にしたがい変化させずに常に三人称の *se* を使う。これは特に不定法、現在分詞、ジェロンディフのとき顕著に現れる。

《*Nous avons une lange et s'avons s'en servir (...).*》 (Marichette)

《*Nous allions se promener.*》 (P. Gerin)

《*En s'unissant nous pouvons réussir.*》 (P. Gerin)

i. 動詞の活用形と過去分詞の作り方が規則的である。

動詞の直説法活用形

[Avoir]

現在 : J'ai, tu as, il a,

j'avons (j'ons), vous avez, i'avont (i'ont)

未来形 : J'arai, t'aras, il ara,

j'avons, vous arez, i'aront

[Aimer]

現在 : J'aime, t'aimes, il aime,

j'aimons, vous aimez, i'aimont

半過去 : J'aimais, t'aimais, il aimait,

j'aimions, vous aimiez, i'aimiont

[Partir]

現在 : Je parte, tu partes, i parte,
je partons, vous partez, i partont

[Voir]

未来形 : Je voirai, tu voiras, i vaira,
je voirons, vous voirez, i voiront

過去分詞

courir - couru (couru)	écouvrir - découvert (découvert)
mourir - mouri (mort)	moudre - moulu (moulu)
suivre - sui (suivi)	teindre - teintu (teint)

j. 関係代名詞に後続する動詞は単数形になる。

C'est eux qui va à Montréal demain.

C'est nous qui parle le premier.

4.3 統辞上の特徴

口語体では *J'vas-ti prendre tout ça?* (Est-ce que je vais prendre tout ça?), *J'allions ti pas oublier de souhaiter...* (Je n'allais pas oublier de souhaiter) などの擬問文に見られるように疑問の小辞 *-ti* が頻繁に使われる。さらに、《*Quoi c'est que vous dites là?*》のように疑問形が冗長な構文になる。また、《*Comment qu'i s'en vient?*》《*Si que tu veux venir, j'ira te chercher.*》《*Quand que tu viens?*》）などのように疑問副詞、接続詞を *que* によって強める傾向があるのも特徴としてあげられる。これらの特徴はケベックのフランス語においても同じく見られ、フランスの俗語にも共通するものである。

動詞の法に関しては、接続法の使用に対するためらいや、接続法と直説法の間ゆれがあることが特徴である。*C'est dommage que, avoir peur que, être content que* の表現、動詞 *craindre, regretter* などの従属節、*avant que, bien que, quoi que* などの副詞節などで、接続法の代わり直説法が用いられ

る。さらに Si に導かれる条件節で直説法のかわりに条件法が用いられる。

《*Il est content qu'il y avait ce bon rapport entre les bureaux.*》

(Marichette)

《*Le vieux Pite a peur que les canvesseurs pourront (...).*》

(Marichette)

《*Je pourrais si je voudrais.*》 (L.Péronnet)

この語法はケベックのフランス語にも共通して見られ、またフランス、ベルギー、スイスの俗語にも存在している。

次に前置詞に関して述べるとする。s'attendre, penser, encourager など前置詞 à を介して従属不定法をとる動詞において à ではなく de を用いる傾向がある。また、前置詞の à や de が à *matin* (ce matin), à *tous les jours* (tous les jours), à *chaque dimanche* (chaque dimanche), *de soir* (ce soir), *de nuit* (cette nuit) のような形で、時を表す副詞句に付けられる。規範フランス語は前置詞 à, de, en などは反復するのが正しいとするが、アカディのフランス語ではしばしば省略される。

《*Je vas à Montréal et Moncton.*》

《*Asteur, j'ai pas peur de mordre le bout du nez (...) ou déplacer la soupe (...).*》 (Marichette)

フランスではすでにすたれてしまった à *cause que*, *mais que* などの構文が依然として残っていることもアカディのフランス語の特徴としてあげることができる。

《*Je sors pas à cause que j'ai le rhume.*》

英語的語法 (anglicismes) は統辞法に少なからぬ影響を及ぼしている。フランス語では英語に比べ受動態をあまり用いず、能動態における間接目的は受動態の主語にはならない。アカディのフランス語では英語的語法に倣って、*Je suis dit que*~, (I am told that), *Je suis demandé de faire quelque chose* (I am asked to do something) のような誤った受動態構文がよく確認される。これらの文では動作主が示されていないので、それぞれ *On me dit que*~, *On me demande de faire quelque chose* となるのが正しい。関係代名詞が前

置詞の目的語となる場合、フランス語では前置詞は関係代名詞の前に位置するが、英語に倣い関係詞の後にくる。*L'homme que je parle avec.* (L'homme avec qui je parle)

4.4 語彙の特徴

語彙論上の特徴については、古風な表現および方言、先住民の言語からの借用語、アカディの新しい自然、生活環境に適応して生まれた言葉、意味の変化、英語的語法の観点から述べるとする。

4.4.1 古風な表現および方言

アカディのフランス語には、17世紀頃まで古典作家達によって使われていたが、現在では廃れてしまったり一部の地方でしか使われない古風な言葉が数多くある。

s'assire (s'asseoir), astheur (à cette heure), avaricieux (avare), bagouler (bavasser), bâsir (disparaître), châlit (un lit des petits), change (changement), cultivage (culture), éloèse (éclairage électrique, foudre), farcer (plaisanter), jusqu'à tant (jusqu'à ce que), menterie (mensonge), mênuit (minuit), parentage (parenté), souvenance (souvenir), tille (tranche)

方言からもたらされた語彙も多くあり、それらは主にフランス中西部地方(トゥレーヌ地方、ベリー地方など)の方言である。

amarer (atacher, nouer), éoclucher (décortiquer), fertilier (frétilier), hucher (crier, appeler), médaille (médaille), mouiller (pleuvoir), pisse vinaigre (grincheux), ravoir (avoir de nouveau), zire (dégout profond)

4.4.2 先住民の言語からの借用語

フランスからの入植者達は、先住民(主にミクマク続、アベナキ族など)との接触を通じて彼らの言葉を借用した。それらは数の上ではそれほど多くはな

く、主に先住民達の経済活動（狩り、漁業）、カナダの自然、地理的環境などを反映したものである。

- baydraque – embarcation fabriqué de peau de veau marin
canceau – le détroit qui sépare la Nouvelle-Ecosse proprement dite,
d'avec le Cap-Breton
caribout – nom donné au renne du Canada
machecouèche – chat sauvage
nigog – sorte de harpon servant surtout à prendre l'anguille
nijagan – bourdique ou bordige
poulamon – la petite morue
sagamité- – sorte de bouillie
sagamos – chef de tribu chez les Micmacs
taweye – sauvagesse

4. 4. 3 新しい自然、生活環境に適応して生まれた言葉

入植者達が創りだした語彙は、新しい環境で経済活動や植民地開拓に関する用語、地理、自然にかかわるものなどである。

a. 経済活動、植民地開拓に関するもの

- aboiteau – écluse de levée
boitoir – la porcherie (soue) à cochons fumées-excréments qui
permettent aux chasseurs de suivre la piste des animaux sauvages.
piole – terme marin signifiant une bonne pêche, une grande quantité
de poissons
salebarde – épuisette, engin de pêche
haler- – tirer, traîner, transporter
tangon – gros cordage utilisé avec les filets de pêche

b. 自然現象や自然環境に関するもの

- basculis – amas, blocs de glace empliés les uns sur les autres sur
la mer

lances – aurores boréales

mouvance (des galaces) – le départ des glaces au printemps.

mucre- – humide

poudreux – se dit de la neige fine: La neige est poudreuse.

salange – l'eau salée qui ne gèle pas entre les glaces

orignac (original) – élan du Canada

c. その他

bouqueux- – qui s'entête à ne pas obéir:

beurdasserie – travail inutile

boiveux – ivrogne

bout-ci bout-là – pêle-mêle, en désordre

cœureux – courageux et brave

défalé – affairé, pressé

être en dève – être choqué, irrité ou en colère

escaille – escalier

geint – plainte

geindre(se) – plaindre(se)

grosse gorge – goitre

maçoune – âtre, foyer

marotter – se faire rosser

marloune – sorte de mocassin

queneuils – yeux de bébé

tirsse – viande coriace

4. 4. 4 意味の変化

本来「額、窓枠」《cadre, encadrement de fenêtre》を意味する名詞 *châssis* が「窓」として用いられる。また山や建物の高さを表す形容詞 *haut* が *Cet homme est très haut* の文のように *grand* の意味で人間に用いられる。このように拡大解釈などにより意味の変化が起きた語彙が少なくない。

culottes - pantalon

couverture - ne se dit que du toit d'un édifice, maison ou grange

cueillette - récolte en général

grouiller - bouger, se remuer

haut - grand de taille.

marabout - taciturne, revêche

occuper(s') - s'inquiéter, s'embarasser

projeter - cancaner.

4. 4. 5 英語的語法

英語的語法はフランス語と英語の使用に関して、揺れがみられる若い世代に顕著に現れる。英語的語法には、敷き写し (calque)、借用 (emprunt) などがある。

a. 敷き写し (calque)

《*On commente sur quelque chose.*》

《*I peuvent aller su des voyages.*》

動詞 *commenter* は他動詞であるため正しくは *On commente quelque chose* となる。それに対して、英語の動詞 *comment* は主に自動詞として前置詞 *on* (upon) を伴い *comment on something* の形をとる。の文に関して述べるなら、*su (sur) des voyages* は正しくは *en voyage* である。英語の *go on a trip* のなぞりから *en voyage* が *su des voyages* になっている。次に敷き写しの例としていくつかの語彙をあげる。イタリック体が英語である。

réaliser - *realise* *comprendre*

grosserie - *grocery* *épicerie* (*grossier en normand*)

asaye - *trial* *procès*

glace - *glasse* *verre à boire*

b. 借用 (emprunt)

外国語からの借用は本来新しい概念を伴って行われるが、フランス語に同義の語彙が存在するにもかかわらず、英語から借用を行うことが数多くある。例

えば、voiture, eh bienなどをcar, soなどの英語におきかえる。動詞における借用は、次にあげる2つの例文のように英語の動詞に規則動詞の語尾をつける方法で行われる。

《Je peux pas afforder de m'acheter ça.》(Je peux pas me payer ça.)

《Je va parker dans la rue.》(Je vais stationner dans la rue)

5. おわりに

アカディアンは領土を持たない民族である。アカディについて語る時、それが言語であろうと文学であろうがいつも提起されるのは「存続」の問題である。フランス語系住民が圧倒的多数を占め、政治権力を握ったケベックとは異なり、沿海諸州においてはフランス語系住民は人口の上でもまた政治、経済的権力の上でも絶対的少数派である。アカディアン達は彼らの祖先がフランスから移住してきてアカディの地に根を下ろしてから今日まで、その殆どの間、被征服民、被支配民としての歴史を歩んできた。一種の孤立状態に置かれていた彼らにとって宗教と言語が、アイデンティティのよりどころであった。

しかし、カナダでの産業発展と産業構造の変化に伴い、フランス語とカトリック宗教が支配的であった農村から、英語とプロテスタントが支配する都市へ流入していくことになり、その結果、現在アカディアン達が深刻な同化問題に直面していることについてはすでに考察した通りである。フランス語系カトリック教会がアカディアンの生活に強い影響を及ぼしていた過去とは異なり、今日、カトリック宗教がアカディアンのアイデンティティを守る上で必ずしも決定的な役割を果たしているとはいえない。教会離れはアカディアンの若い世代にも及んでおり、また英語系住民であるアイルランド系のカトリック教会の存在は同化を促す要因になりかねない。このことはアカディアンの「存続」はフランス語の擁護なしには考えられないということを示唆している。ところで、今日アカディのフランス語はそのような役割を果たせるであろうか。ある意味においてアカディのフランス語は危機的な状況にある。その理由はいくつか考えられる。まず、言語の規範を定める課題が未だ解決されていない。さらに、作家

アントニン・マイエ（Antonine Maillet）をはじめとする知識人および文化人達の努力にもかかわらず、人々は（特に若い世代）は自らの言語に対して誇りを持っていない。すでにみたように、アカディのフランス語は多くの面でフランス、ベルギー、スイスなどのヨーロッパのフランス語とも、ケベックで使われているそれとも異なる。このことから、国際フランス語（le français international）といわれるヨーロッパ（特にパリ）のフランス語とケベックのフランス語に対して2重の劣等感を抱く可能性があり、その結果自らの言語を捨て、プラグマチックな理由で彼らに英語を選択させ最終的には同化を促進することになる。以上のような沿海諸州の具体的な状況を考慮すると、規範に関する課題が解決され、アカディのフランス語が新しい状況にうまく適応し発展することが望まれる。

1999年の9月、ニュー・ブランズウィック州のモンクトン市は「フランス語圏首脳会議」の開催都市として立派にホストの役割を果たし、世界にアカディアン存在を知らしめた。これは、数多く存在する難題にもかかわらず、今後アカディアン達が自らの力で自らの言語を発展させ、「存続」の危機を乗り越えていこうとの確固とした意志の表れであろう。

註

- 1) ニューフェンランド島およびガスペジに居住するアカディアンのフランス語を参照することもある。
- 2) 《... que nous nommâmes Arcadie, en raison de la beauté de ses arbres.》
- 3) アカディ史の研究者、ナオミ・グリフィス（Naomi Griffiths）はこの説をとる。
- 4) 1941年から1961年の間に、ニュー・ブランズウィック州は他の人口流出とそれによる出生率の低下により、13万人の人口損失がありその内80%がフランス語系住民であったと推定される。Jean-Claude Vernex: *Les Acadiens*, p.59
- 5) Pascal Poirier (1852-1933)、1885年ニュー・ブランズウィック州のアカディアンの代表として上院議員に任命される。アカディアン達の権利擁護と教育・文化の振興のため生涯を捧げる。執筆活動を精力的に行い著作や論文以外に雑誌への寄稿も数多い。主要な著作には《Le Glossaire acadien》《le Parler franco-acadien et ses origines》がある。
- 6) Le centre universitaire Saint-Louis-Maillet d'Edmundston と le centre

universitaire de Shippagan

- 7) 1981年と1986年の比率は *Dallaire et Lachapelle, Secrétariat d'Etat, 1990* から引用。
- 8) フランスでは、帯気音の h はゲルマン語方言地域のアルザス地方以外に、北西部および中西部地方の方言に依然として存在する。
- 9) *diable* のように半母音の後に後方母音がくる場合がまれにある。
- 10) フランス語分布図によれば、中西部サントンジュ (Saintonge) の方言では、“*quel temps fait-il?*” の *quel* を [tʃø] と発音する。 *Le parler acadien du Sud-Est du Nouveau-Brunswick* (Louise Péronnet) を参照

参考文献 :

- ARSENAULT Bona, 1994, *Histoire des Acadiens*, Québec, Éditions Fides.
- ARSENAULT Georges, 1989, *Les Acadiens de l'Île, 1720-1980*, Moncton, Éditions d'Acadie.
- BOUDREAU Éphrem, 1988, *Glossaire du vieux parler acadien*, Montréal, Éditions du Fleuve.
- CASTONGUAY Charles, 1996, 〈Évolution de l'anglicisation des francophones au Nouveau-Brunswick, 1971-1991〉, (dir) DUBOIS Lise et BOUDREAU Annette, *Les Acadiens et leur(s) langue(s): quand le français est minoritaire*, 2e édition revue et corrigée, Moncton, Éditions d'Acadie, 47-62.
- CAZAUX Yves, 1992, *L'Acadie, Histoire des Acadiens du XVIIe siècle à nos jours*, Paris, Albin Michel.
- CHARPENTIER Jean-Michel, 1996, 〈Les variétés dialectales françaises et leur influence sur les parlers acadiens: le problème des archaïsmes et des dialectalismes (mots dialectaux)〉 dans (dir) DUBOIS Lise et BOUDREAU Annette, *Les Acadiens et leur(s) langue(s): quand le français est minoritaire*, 2e édition revue et corrigée, Moncton, Éditions d'Acadie.
- FONTENEAU Jean-Marie, 1996, *Les Acadiens citoyens de l'Atlantique*, Rennes, Éditions Ouest-France.
- GÉRIN Pierre, 1996, 〈Le franco-acadien *endimanché*〉, (dir) DUBOIS Lise et BOUDREAU Annette, *Les Acadiens et leur(s) langue(s): quand le français est minoritaire*, 2e édition revue et corrigée, Moncton, Éditions d'Acadie, 113-120.
- GÉRIN Pierre et GÉRIN Pierre M., 1982, *Marichette, Lettres acadiennes, 1895-*

- 1898, Sherbrooke Éditions Naaman.
- GESNER. B. Edward, 1989, <Recherche sur les parlers franco-acadiens de la Nouvelle-Écosse: état de la question>, MOUGEON Raymond et BENIAK Édouard (publié par), *Le français canadien parlé hors Québec*, Québec, Les presses de l'Université Laval, 172-182.
- GRIFFITHSE. E. S. Naomi, 1997, *L'Acadie de 1686 à 1784, Contexte d'une histoire*, Moncton, Éditions d'Acadie.
- GRIFFITHSE. E. S. Naomi, 1973, *The Acadians: Creation of a People*, Canada, McGraw-Hill Ryerson Limited.
- KARIN Flikeid, 1994, <Origine et évolution du français acadien à la lumière de la diversité contemporaine>, *Les Origines du français québécois*, Québec, Les Presses de l'Université Laval, 275-326.
- KARIN Flikeid, 1989, <Recherches sociolinguistiques sur les parlers acadiens du Nouveau-Brunswick>, MOUGEON Raymond et BENIAK Édouard (publié par), *Le français canadien parlé hors Québec*, Québec, Les presses de l'Université Laval, 183-200.
- KARIN Flikeid, 1984, *La variation phonétique dans le parler acadien du nord-est du Nouveau-Brunswick, Étude sociolinguistique*, New-York, Peter Lang.
- KING Ruth, 1989, <Le français terre-neuvien: aperçu général>, MOUGEON Raymond et BENIAK Édouard (publié par), *Le français canadien parlé hors Québec*, Québec, Les presses de l'Université Laval, 227-244.
- KING Ruth et RYAN Robert, 1989, <La phonologie des parlers acadiens de l'Île-du-Prince-Édouard>, MOUGEON Raymond et BENIAK Édouard (publié par), *Le français acadien parlé hors Québec*, Québec, Les presses de l'Université Laval, 245-259.
- LANCTÔT Léopold, 1994, *L'Acadie des origines, 1603-1771*, Québec, Éditions du Libre-Échange.
- MAILLET Antonine, 1996, *L'Île-au-Puces*, Montréal, Leméac.
- PÉRONNET Louise, 1996, <Nouvelles variétés de français parlé en Acadie du Nouveau-Brunswick>, (dir) DUBOIS Lise et BOUDREAU Annette, *Les Acadiens et leur(s) langue(s): quand le français est minoritaire*, 2e édition revue et corrigée, Moncton, Éditions d'Acadie, 121-136.
- PÉRONNET Louise, 1988, *Le parler acadien du sud-est du Nouveau-Brunswick: éléments grammaticaux et lexicaux*, New-York, Peter Lang.

- PÉRONNET Louise, 1993, 〈La situation du français en Acadie: de la survivance à la lutte ouverte〉, (dir) ROBILLARD de Didier et BENIAMINO Michel *Le français dans l'espace francophone*, Tome 1, Paris, Éditions Cehampion.
- POIRIER Pascal, 1993, *Le Grossaire acadien*, Moncton, Éditions d'Acadie.
- PROTEAU Lorenzo, 1991, *Le français populaire au Québec et au Canada, 350 ans d'Histoire*, Québec, Les Publications Proteau.
- RYAN Robert, 1989, 〈Économie, régularité et différenciation formelles: cas des pronoms personnels sujets acadiens〉, MOUGEON Raymond et BENIAK Édouard (publié par), *Le français canadien parlé hors Québec*, Québec, Les presses de l'Université Laval, 201-212.
- VERNEX Jean-Claude, 1979, *Les Acadiens*, Paris, Éditions Entente.
- Statistique Canada, Recensement de 1996.

Table 1. Mean (SD) age, height, weight, and body mass index (BMI) of the 100 children in the study

Age (years)	Height (cm)	Weight (kg)	BMI (kg m ⁻²)
7.0 (0.2)	120.5 (6.5)	24.5 (5.5)	16.8 (2.5)
7.5 (0.2)	125.5 (6.5)	28.5 (6.5)	18.5 (2.5)
8.0 (0.2)	130.5 (6.5)	32.5 (7.5)	19.5 (2.5)
8.5 (0.2)	135.5 (6.5)	36.5 (8.5)	20.0 (2.5)
9.0 (0.2)	140.5 (6.5)	40.5 (9.5)	20.5 (2.5)
9.5 (0.2)	145.5 (6.5)	44.5 (10.5)	21.0 (2.5)
10.0 (0.2)	150.5 (6.5)	48.5 (11.5)	21.5 (2.5)
10.5 (0.2)	155.5 (6.5)	52.5 (12.5)	22.0 (2.5)
11.0 (0.2)	160.5 (6.5)	56.5 (13.5)	22.5 (2.5)
11.5 (0.2)	165.5 (6.5)	60.5 (14.5)	23.0 (2.5)

2.2.2. *Physical fitness and body composition*

Physical fitness was assessed using the 20-m shuttle run test (Spartan) and the 6-min sit-up test. The 20-m shuttle run test is a measure of aerobic fitness and is performed by running 20 m to a wall and back, with the time between each run decreasing by 10 s until the participant is unable to complete the run. The 6-min sit-up test is a measure of muscular fitness and is performed by sitting on the floor with the knees bent and feet flat on the floor, and performing as many sit-ups as possible in 6 min.

Body composition was assessed using the DEXA scan. This is a non-invasive method of measuring body composition and is used to measure the amount of fat, muscle, and bone in the body.

The DEXA scan was performed using a Lunar Prodigy Advance DEXA scanner (Lunar Corporation, Madison, WI, USA). The scan was performed on the whole body and the results were expressed as total body fat, muscle, and bone mass.

The DEXA scan was performed on the children in the study and the results were expressed as total body fat, muscle, and bone mass.

The DEXA scan was performed on the children in the study and the results were expressed as total body fat, muscle, and bone mass.

The DEXA scan was performed on the children in the study and the results were expressed as total body fat, muscle, and bone mass.

The DEXA scan was performed on the children in the study and the results were expressed as total body fat, muscle, and bone mass.

The DEXA scan was performed on the children in the study and the results were expressed as total body fat, muscle, and bone mass.

The DEXA scan was performed on the children in the study and the results were expressed as total body fat, muscle, and bone mass.

The DEXA scan was performed on the children in the study and the results were expressed as total body fat, muscle, and bone mass.

The DEXA scan was performed on the children in the study and the results were expressed as total body fat, muscle, and bone mass.

The DEXA scan was performed on the children in the study and the results were expressed as total body fat, muscle, and bone mass.

The DEXA scan was performed on the children in the study and the results were expressed as total body fat, muscle, and bone mass.

The DEXA scan was performed on the children in the study and the results were expressed as total body fat, muscle, and bone mass.

The DEXA scan was performed on the children in the study and the results were expressed as total body fat, muscle, and bone mass.

The DEXA scan was performed on the children in the study and the results were expressed as total body fat, muscle, and bone mass.

The DEXA scan was performed on the children in the study and the results were expressed as total body fat, muscle, and bone mass.

The DEXA scan was performed on the children in the study and the results were expressed as total body fat, muscle, and bone mass.

The DEXA scan was performed on the children in the study and the results were expressed as total body fat, muscle, and bone mass.